

Circle Story of Meiji University

明大サークル物語



体同連和泉ラグビー部

体同連和泉ラグビー部、「MRC」は
今年で創部60周年を迎える明治大学公認サークルです。

純粹にラグビーが好きな人たちが自然に集まり、
例年50名近い部員が和泉のグラウンドでラグビーをしています。
合宿、遠征、大会と様々な活動は、大学生活を多いに充実させるとともに、
今まで体験したことのないラグビーの楽しさを発見できるサークルです。

執筆者： 佐藤壮大(商学部4年)

MRC

初めに ラグビーの魅力

泥だらけで汗臭い、痛い、激しい、
疲れる。ラグビーに対するイメージ
は決して綺麗なものではありません。
大学生になってまで、どうしてそんな
辛いスポーツをするのか。それは
もったもた考えたでしょう。

ではどうして我々はラグビーをする
のか。

ラグーマンがラグビーをするのは、
そんなイメージがラグビーを経験す
ることによって消えていき、その中
に楽しさを見いだせることにあるの
ではないかと思えます。

ラグビーはただの格闘技のような
球技ではありません。非常に緻密な
ルールを持つ、極めて「頭を使う」ス
ポーツです。試合中に目まぐるしく
変わる戦況を分析しながら戦わねば
なりません。端的に言えば、痛いや
疲れたと言っている場合ではないの

です。だからこそ勝利の味は格別で
楽しいと思えるのです。

またラグビーにおける代表的なス
ローガン「One for All, All for One」
はまさにラグビーを体現しています。

これは、仲間を思う言葉でもあり、
この言葉無くして勝利はありえない
ことも示しています。ラグビーは15
人で戦うスポーツですが、1人でも
欠けてしまえば勝つことはできませ
ん。この多人数でのチームプレイは
同時に仲間との強固な絆になります。
だからこそ、どんなに悪いイメージ
でも大切な仲間達とつかみ取る勝利
はなものにも代えがたいものとな
ります。それこそがラグビーをする
原動力なのです。

我々体同連和泉ラグビー部はそんな
強く、楽しいラグビーを目指して
います。ご紹介の中でその空気の一



慶應大との一戦

部でも伝えられることができれば幸いです。

和泉ラグビー部の歴史

明治大学和泉ラグビー部（協会登録名、明治大学MRC。以下MRCと表記する）は昭和27年、当時の新生竹島明を中心に商学部教授、和田政雄先生を訪ね、明治大学にもクラブチームを作ってラグビーをしたいという思いから始まりました。当時は慶應JSKS、BYB、早稲田GWの3チームしかクラブチームはありませんでした。

創部当初は、部員も少なく人数も思うように練習に集まらず、活動自体が大変な時期でした。しかし、明治大学ラグビー部、北島忠治監督のご尽力も賜り、八幡山での練習に参加させていただくことも多々ありました。北島監督はラグビーを愛する

者は誰でも受け入れるという信念をお持ちの方で、MRCの創生期を支えてくださいました。

1971年、昭和46年には、関東ラグビーリーグ(KCRF)において初優勝を飾ると、MRCは強豪としての名をはせていきます。当時の活動といえば、週の火曜日から土曜日まで練習をし、日曜日は試合をするといった、ラグビー一色に彩られたものでした。大学生活のほぼ全てをラグビーに費やした部員達の熱意と真摯さは今のMRCにとっても貴重な財産であります。

そのMRCを支えてくださった和田政雄先生は、昭和60年、12月2日にご逝去なされました。和田先生の言葉にこんなものがあります。

「MRCは先ず勉強すること、そして余暇にラグビーを楽しみ勝負にこだわらずフェアプレーをする」と

この言葉はもはやクラブを代表する言葉といっても過言でなく我々の根幹を今でも成しています。次いで



関西学院大戦

MRC

部長に寺島善一先生、昭和62年には朝比奈秀次先生が副部長として就任されました。

平成3年よりMRCは怒涛のKCRF9連覇を果たします。この間新たに商学部村田潔教授が部長として就任します。村田先生は自身のラグビー経験を生かし、何よりも学生の目線でご指導してくださいませ。MRCの強さはそこにあります。上級生、下級生、OB、部長と構成員の間に壁はなく、縦の関係もあります。全員がフラットであるからこそ、自分達がしたいラグビーが十分できるのです。村田先生留学の折には山下洋史教授が代理部長としてご協力いただきました。MRCは今年で創部60年を迎え、今なおクラブの代表的存在の一つでもあります。ここまでの発展は歴代の部長先生方を始め、充実した環境を提供してくださる明治大学のおかげであることは揺るぎありません。部員達は恵まれた環境の中、ラグビーを楽しみ、強さへの渴望を胸に、日々和泉のグ

ラウンドでボールを追っています。

英国遠征

MRCの活動において忘れてはならないのは英国遠征です。昭和60年に和田先生がご退任された後、寺島善一先生が部長に就任されました。寺島先生はご就任の挨拶の中で、「私はMRCをラグビー発祥の地、英国に連れて行く」とおっしゃいました。当時の部員達は、国内遠征もおぼつかない時期であったため、半信半疑であったようです。しかし昭和62年3月に第一回の英国遠征を実現させてくれました。これも一重に寺島先生のスポーツを愛する信念のご恩恵であると感謝しています。これより英国遠征はMRCの大イベントとなります。今年の3月に行われた第10回英国遠征まで、一時の中断はありながら続いています。



英国遠征の様子

英国遠征の醍醐味といえば、日本では体験しにくい、圧倒的体格差のあるチームと対戦することにあります。ひたむきに諦めないプレーを本場で磨くことは、MRC成長の大きな経験となりました。そしてなによりも、同じラグビーを愛する者同士、その間に国境はなく、言葉の壁も感じさせないような深い交流がでます。

この英国遠征は他のクラブにはありません。だからこそ、この先もMRC伝統のイベントとして、未永く続いていくことを願って止みません。

近年の実績

近年MRCの最も輝かしい実績と言えば、2009年度の総合優勝にあります。第55期は、他クラブをよせつけない圧倒的強さで関東学生

クラブ優勝。そして、関西代表との試合にも勝利し、学生クラブの頂点に上り詰めました。

またこの時、クラブラグビー界にとっても大きな成果を残しています。MRCは全国地区対抗戦への挑戦権を手にし、関東第一区、新潟大学との対戦に望みます。クラブと体育会の間ではやはり、技術やフィジカルに大きな差があるとされてきました。しかしMRCはこの強大な相手に一歩も引くことなく戦い、ついに引き分けという結果を残しました。スコアは19-19。両者一歩も譲らない攻防でした。

次戦への挑戦権をかけたくじ引きで、惜しくも勝利を逃したMRCでしたが、クラブシーンにおいて体育会と対等に戦えるという一つのイメーজ革新をMRCは成し遂げたのです。

次ぐ56期の代でも東京都市大学体育会との勝負に臨みます。この時は7-184という大差で辛酸をなめました。

Circle Story of Meiji University

MRC

このような戦歴の中でMRCの意識にも変化が訪れます。それは目標が「体育会撃破」となりつつあることです。55期の代を皮切りに、本当に強いチームを目指し始めました。そしていつか、体育会撃破を成し遂げる最初のクラブチームはMRCであることを夢見ています。

2011年 夏合宿報告

9月1日から5日まで行われた菅平夏合宿の様子を報告させていただきます。この期間は不幸にも台風上陸の時期と重なってしまい連日雨が降っていました。しかし活動はおろそかになることなく、計5試合を戦いました。この夏合宿こそが秋の大会への最後の調整期間でもあるため、部員達の気持ちも引き締まっていたように思われます。

例年であればこの合宿は10日にも

及ぶ大イベントであります。これはイギリス遠征と並ぶMRCの魅力でもあります。この合宿を通して、仲間との絆がさらに深まっています。

終わりに 創部60年の理由

MRCは本当に多くの方に支えられて活動しています。部長をしてくださる先生方、充実した環境を提供してくださる明治大学、多大な支援をしてくださるOB各位。いずれが欠けてもMRCは成り立ちません。この記事を書くにあたり、OBの方にお話をお聞きする機会がありました。そこで「よく60年も続いたなあ」と感嘆しておられました。我々はこの節目の60年目においても一度MRCを支えてくださる皆様に感謝し、歴代の方々がそうしてきたように、思いっきり楽しんでラグビーしていきたいと考えております。



合宿集合写真



合宿での練習風景